意味と志向性

土屋純一

一

志向性と志向的な言語　心とものはたらきを区別する手がかりとして、よく引き合いに出されることに、志向性(intentionality)の概念がある。われわれの心のはたらきは、――少くとも「考える」、「信ずる」、「疑う」といった一群の動詞で示されるような作用は、つねに何かを志向する、とされる。思想は何かについての思想である。言語に即して考えると、われわれは或る種の心的な作用または状態について語るためには、志向性をふくむ言語を用いなければならない、と言われている。

志向性を心理的なものの本質とみるチズルム*は、志向的な文の徴表を三つ挙げている。

(a)　「かれは火星人のことを考えている」という文からわれわれは火星人が存在するかどうかについての情報を受けとれない。このように existential import をもたない文は志向的である。

(b)　「信ずる」・「疑う」などの動詞が文法上従属文(副文章)をとるような文、いわゆる propositional attitude は志向的である。そこでは従属文の真理値は全体の真理値が定まっても決まらない。

(c)　名辞(term)のおきかえによって真理値が変りうるような用法をふくむ言語は志向的である。太郎の記述が「この町で一番背の高い男」であるとき、「私は太郎を知っている」が真であっても「私はこの町で一番背の高い男

を知っている」は真とは限らない。しかし「私はかれよりも五センチ背が低い」のような構文では上のような動揺が起きることがない。

これらの区別徴表に狙いをつけた上でチズルムが主張することは、第一に、物的な現象を記述するのには志向的な言語は要らないこと、第二に、或る種の心的な現象を記述するためには志向的な言語を使わなければならないか、もしくは物的なことを記述するときには必要でなかったような語彙が要るかである、というのである。簡単には、志向的な言語によってしか記述できないような事実があり、それを心理現象とよぶ、と言ってもよいだろう。もちろんこの主張の正しさをみとめるにしても、それは心理現象と物理現象とはべつの世界のできごとである、という二元論をそのまま含意するとは言えない。（チズルムの意図もこの二元論の主張にあるとはみえない。）

ところで、今世紀の心理学においては行動主義（behaviorism）の強力な運動が展開されてきた。その基本的な主張は、消極的には、内観（introspection）を心理研究の信頼しうる基底としては排斥することであり、また積極的には、心理学でつかわれる概念はすべて行動または行動の傾向に関する観察語句（observation terms）によって定義できるものでなければならない、ということであろう。ただし、このとき〃心理学者としてのわたくしがここで使用する概念は……〃というのでなく、すべての心理学上の概念が観察言語へ還元される、と主張されているのであれば、それは一見方法論的にみえながら、はなはだ哲学的な提言であったと言ってよい。この〃哲学的行動主義〃の原理が正しく、かつそこで言われている観察言語が志向性の言語とは独立のものであるならば、さきのチズルムの命題はくずれることになる。他方、チズルムの戦略は、精神の作用をしめす語句をふくむ文をとり、それらが志向的でない文に翻訳しつくされることはない、として、哲学的行動主義を否定することであった。

* Cf. Chisholm, R. M. 'Sentences about believing', *Proceedings of the Aristotelian Society* **56** (1955–56), 125–148. Reprinted with revisions in *Minnesota Studies in the Philosophy of Science* **2** (1958), 510–519. かれの著書 *Perceiving:*

A Philosophical Study (Ithaca, 1957), Ch. XI もほぼ同じ論旨である。

二

行動主義的手法の限界——「意味」の意味　心のはたらきの一象面としてここでは、思想（thought）を取りあげよう。ただしデカルトなどの用語よりずっと狭くとって、概念的（conceptual）な "higher process" だけを指すことにする。（「思想」は正確に言えば「思想の作用」（'act of thought'）とすべきかも知れない。しかし必ずしも作用—内容—対象という図式に言質を与えるものではない。なお、「思考」（'thinking'）というと能働的な感じが強いように思われるので、用いない。）われわれの問題は思想について行動主義的なアプローチをどこまで進めることができるかという点から始まる。

或るひと x の思想をたしかめるために、或る適当な刺戟状況を与えたとき、x の観察可能な行動が反応として得られる、と考えられる。容易に想像されるように、この際のテスト条件は、——すなわち刺戟状況および反応として選ばれるものは、overt な言語行動（verbal behavior）である。素樸に考えると、x が質問の文 'p?' に対して肯定的な反応を示すとき、かつそのときに限り、x は p ということを考えている、とすることができそうであるが、「'p?' があれば、そのとき肯定的反応がある」というときの「ならば」の用法が、ふつうの条件法と解されているかぎり、定義としては成り立たないことはよく指摘される通りである。従って、ここでは〃傾向〃（disposition）という概念を使わなければならない。すると

(1)　x は p ということを考えている ≡ x は 'p' を発言する（utter）〃傾向〃をもつ

と書けそうである。しかし、'p' でなくとも、〃意味〃が同じであれば記号としては異っていてもよいから、「'p'」の後に「またはそれと同じ意味の（synonymous）任意の文」と追加するか、あるいはSを任意の文として、

(2)　xはpということを考えている ≡ (∃S)（xはSを発言する〃傾向〃をもつ・Sはpを意味する）

とでもすべきであろう。すなわち、

(3)　ジョンは、雨が降っている、と考えている

(4)　ジョンは「雨が降っている」を発言する〃傾向〃をもつ

において、ジョンが日本語を知らないならば、(3)から(4)を帰結することは誤りとなる。しかし(3)は

(5)　ジョンは 'It is raining' を発言する〃傾向〃をもつ

(6)　'It is raining' は、雨が降っている、ということを意味する

の連立と等置である。ここで(6)は意味論上の話 (semantical discourse) に属する言明であるが、しかしその際の「意味」の意味が明確にされなければならない。(6)は抽象的関係の記述ではないとすれば、われわれの言語行動の記述なのであろうか。すなわち、

(7)　英語の 'It is raining' は、人間の言語行動のうちで、日本語の「雨が降っている」と同じ役割 (role) を演じている

ということであろうか。ここで、言語の学習は刺戟—反応という関係を基本にする、という広く受けいれられている見解をみとめるなら、(7)から

(8)　英語国民が 'It is raining' を使用するための因果系列と、日本語国民が「雨が降っている」を使用するための因果系列とが相似である

ことが帰結する。意味論的言明は言語行動の一般的傾向ないし習慣についての記述に還元されるのであろうか。しかし(6)と(7)の間には同義性が成立しない。そのことを確かめるためにそれぞれの英語への訳文を作ってみる。*

(6′)　'It is raining' (in English) means *it is raining*

(7′) 'It is raining' (in English) plays the same role as 'Ame ga futte-iru' (in Japanese).

英語国民はこの一対の文を示されたとき、日本語を知っていないならば(7′)に肯定を与えることはできない。つまり(6)を理解するひとは暗黙のうちに、「雨が降っている」が日本語として演ずる役割のリハーサルをしたために、(7)を帰結できたのである。(6)は(7)に対して副次的情報を与えたのではなく、リハーサルを命じたのであり、(7)あるいは(8)によって確認されるような仮設を提出したのである。一般に上の形の意味論的言明、翻訳のための鋳型は、言語行動の傾向の記述ではないけれど、そのような記述を或る条件のもとでは含意するとみられる。前者は後者についての情報を convey はするけれども assert しているのではない、とも言われる。**

* Cf. Church, A. 'On Carnap's analysis of statements of assertion and belief,' *Analysis* **10** (1950), 97-99. Reprinted in *Philosophy and Analysis* (Oxford, 1954), 125-128.

** 「'...' means——」という鋳型の分析について、cf. Sellars, W. *Science, Perception, and Reality* (London, 1963), 109-115, 161-164, 271-281, 311-316, 332-335, 354f.

なお、セラーズは、それ自身は記述的でない言明が記述的な言明を含意するという事情は、道徳上の発言の場合と類比的に理解できると言ってもいる。「嘘をつくな」という命令は記述でないが、この命令が意味をもつ社会では、その発言の主体の心理や行動の傾向についての記述を含意しうる、と言える。それは〃自然主義的還元〃とは別のことである、と。Cf. 'Mind, meaning, and behavior', *Philosophical Studies* **3** (1952), 83-95.

三

思想の志向性と意味の〃志向性〃 或る種の過程——ここでは思想——を述べる文章は、行動主義の言語 (Behavioresse) に還元できないような性格のもの、すなわち、意味論上の話をふくむということは、後者がじつは心的な話 (mental discourse, mental talk) に属するのではないかという考えを示唆する。そしてさきのチズルムの規準をみと

めれば、意味論上の言明は志向的な言語の徴表を備えている。例えば

(9)　英語の‘giant’は巨人を意味する

は正しいけれど「巨人が存在する」をも、その否定をも含意しない。また、(6)や(9)では指示ではなくて意味が問題とされている以上、不可辨別者同一の原理が使えないことも当然である。チズルムは自然言語における意味（内包）の定義を試みたカルナップの方法を批評して、意味の定義には、言語の使用者の行動またはその傾向を記述するだけでは足りないのであって、心的な・従って志向的な語句、例えば‘believe’, ‘take’, ‘accept’等を導入しなければならないと論じた。* 内容的話法でのべれば、われわれがことばの〝意味がわかる〟のは、心というフィルターを通してのことだ、とも言われよう。一般に、記号が有意味であるのは、記号が考えを表現（express）するからであり、記号が何かを指すのは、考えが或る対象を志向する（〝……について〟という性格［aboutness］をもつ）からだという、古典的な考想が呼び戻されることになる。

この考想のもとでは、文章が有意味であるのは、思想を表現するからである。すなわち

(10)　‘p’はpを意味する

のは、

(11)　‘p’は思想tの表現である・tはpを志向する

からである。チズルムは(11)は(12)によって、意味の志向性は思想の志向性によって、分析されると言う。この際「分析」の語義は必ずしも明確でない。後者が前者の源泉（source）である、といわれるのは、言語行動がまったくないと仮想してもわれわれは（いかに貧弱な内容となるにせよ）思想をもちうるが、その反対は成り立たない、という想定によるのであろう。しかし、このことは、われわれは(11)の鋳型を手に入れたのち初めて(10)を作り出すことを意味しないだろう。つまり、思想のカテゴリーが意味論のカテゴリーに、方法論上先立つことは必然でない。

チズルムは(10)が(11)によって分析されることを「生きものはふつうの物的なものがもたぬ奇妙な特性（志向性）をもつ」というモデルに読みかえ、(11)が(10)によって分析されることを「しるし（marks）や音は生きものや他の物的なものがもたない奇妙な特性をもつ」とする。しかし、この特性はどちらに属するのか？という問い方は誤解のもとでもある。なぜなら、一般に「……は特性xをもつ」の形式的話法への読みかえは「‘…x…’は（特性）記述的である」であろうから。ところで(10)は記述的ではない。それは〝しるしや音〟（$\hat{p}$）の言語における機能（役割）についての記述を引き出すための鋳型である。（この事情は将棋の駒について「これは桂馬である」という言明は、その機能についての言明を含意するのであって、「……の形をし、材質は……で……」といった言明が記述であるのと、少くとも同じ意味の記述ではないことと類比的であろう。）

セラーズもまた、言明は思想の表現であるという古典的な解釈を支持するけれども、われわれが言語について語るための意味論的カテゴリーは精神の作用（志向性）のカテゴリーによって分析されるのではないとした。** ただし「xはyによって分析される」は、「xという概念をもつ人がyという概念をもたないというのは正しくない」を含意すると取られた。そこでセラーズはわれわれが精神の作用の言語の使用を、人間行動の発展のどの段階まで延期できるかという思考実験（かれの形容では〝ミュートス〟）を試みた。

出発点で与えられるのは〝もの〟言語（論理の文法を含めて）である。この言語によって傾向や因果関係がよく表現できるかどうかについては議論がわかれるであろうが、ここでは肯定的な答を前提しておく。するとこの Behaviorese を装備した Behaviorist は、かれの属する社会の人びとの overt な言語行動とその傾向あるいは習慣を記述するばかりでなく、非-言語的な（言語外の）状況と言語行動とのあいだの因果関係を刺戟—反応の図式で整理することができるであろう。（それは例えばスキナー流の分析であり、まだ生理学的説明ではない。）

この〝行動学〟がさまざまな言語を通じて適用されるためには、そのメタ言語、すなわち翻訳のための鋳型が導入

されるだろう。（すでにのべたようにそれは行動主義の内部では組立てられなかった。）ところでこの拡張された〝もの〟言語のみを使用し（精神の作用を指示する言語をもたない）人びとの行動を観察し一般化する〝行動学者〟は、かれらが overt な言語行動を伴わずに一聯の合理的な行動を示すという事実を、思想によって解釈することができる。（この段階では〝心の内に〟という含みは必要でない。）すなわち、太郎が‘p’という発言をしたならば、それに先立って、太郎がpということを考えている（p-思想をもつ）という過程があり、‘p’はその表現（expression）なのであると説明される。ここで言う思想はホッブズ風に一聯の心像だと解されるには及ばない。それは始めと終りをもつという意味で事件（episode）であり、時として overt な言語行動として完結する。

思想の言明は、その身分においては、観察言明でも傾向の言明でもなく、またライルの言う〝定言命題と仮言命題の合の子〟（事件〔episode, occurrence〕と傾向との両面を指示するとみえる文）でもなく、理論的である。そこで指示されている思想は、物理学における長さの概念や温度の概念と同じような地位の理論的構成（theoretical construct）〔仮設的存在 hypothetical entity〕である。思想はある種の行動を説明するのであって、行動に還元されるのではないけれど、その確認の具体的方針を与えるものは行動である。われわれは他人の心に関する言明を、観察（報告）のつみ重ねと、意味論上の仮定とを参照することによって確認（confirm）する。

このような説明が〝隠れた性質〟へ訴えたものでないかどうかの検証には、モデルの概念を使うことができる。(10)と(11)の関係に戻ると、

(12)　‘p’がpを意味するのは、‘p’が思想tを表現し、tはpを志向するからである

という説明は、(10)が(11)という〝一層基本的なもの〟に還元されることではなく、むしろ(11)は(10)をモデルとして理解されるということである。モデル理論の例としてよく引かれる気体運動論を取ろう。気体の圧力は、そのモデルにおいては、乱雑な運動をする気体分子が容器の壁に完全弾性衝突をして及ぼす力の総和として理解される。モデルをつく

ることの意義は、単に原型に対しわれわれになじみ深い表象を対応させることにとどまらず、重点はモデルに関して理論がつくられること、上の例では古典力学が適用できることにある。このようなことが「モデル」の用法であるとすれば、semantical talk が mental talk のモデルなのであり、志向性のモデルは意味関係である。思想が inner speech であるといわれるのはこの用法でのことであって、心の内で言語的心像の活動写真が上映されることではない。従って、(11)は

(13) t は inner speech において、'p' が或る言語において演ずるのと、同じ役割を演ずる

を含意することになり、この含意関係のモデルは、「言語Lのうちの表現Eは、pを意味する」という意味論上の図式が

(14) Lのうちの E は、べつの言語L′の表現 'p' と同じ役割を演ずる

を含意することであった。

しかし思想がとくに *inner* speech であると言われるためには、別の面から議論の補強がなくてはならない。われわれは日常、mental discourse を使って、内観（内省）報告をつくり、少くともその限りでは自己の思想に関して privileged access をもつと信じられる。セラーズは、人びとの言語行動は思想の表現であるならば、その後に、自分の意識の報告にこの思想の言語を使うことができる、という。例えば、太郎と次郎が上の思想-理論を学んでいるならば、太郎が、次郎の行動の観察にもとずいて「次郎はpということを考えている」という言明をつくる状況では、次郎は同じ証拠によって「私はpということを考えている」という言明をつくれる。そして次郎はしだいに、行動の観察と推理なしに、上のような描写をつくることを学習していく。これが内省報告であって、その学習は、太郎らの他人が、次郎が内省報告をする際の状況が「次郎はpということを考えている」を確認させるときには肯定を、そうでないときには否定を与えていくことで強化されるであろう。すなわち、mental talk によってわれわれが内省報告

を行うのは、理論的な言明が報告的（reportive）な用法を〝獲得〟するからである。

* Cf. Chisholm, R. M. *op. cit.* および 'A note on Carnap's meaning analysis,' *Philosophical Studies* **6** (1955), 87–89.

** この節全般に関して、参照、Sellars, W. *op. cit.* Ch. V. ('Empiricism and the philosophy of mind', 当初発表場所は *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, **1** (1956) 特に §§ 46–59. Sellars, W. & Chisholm, R. M, 'Intentionality and the mental' (往復書簡)、*Minnesota Studies* **2** (1958), 507–539.

四

心身問題　〝心身問題の解決〟としてしばしば提出される同一説（identity theory）を詳論することは、当面の論題ではないけれど、概念的思想について以上のような解釈がとられるならば、〝高級な〟精神作用とされる思想のほうが、感覚よりも、物的な過程との同一に当って困難を感じさせることが少ないことが注目される。赤く見えるという感覚または raw feel を、一聯の生理学的過程に還元することに対する根づよい反論は、その生理過程そのものは赤くない、ということに要約されよう。この論法はしかし思想については的はずれになる。なぜなら、自覚（self-awareness）においては、思想が概念的な様相ではなく、直接経験として現前している、とするのは、感覚や心像の場合との混同にもとずくからである。内省報告はそれ自体心身の二元論に言質を与えるものではなかった。仮設された存在としての思想を、その質的な相においては神経生理学的過程と identify することには、基本的な困難はなさそうである。形式的話法によるなら、思想の言明の記述的用法は、神経生理学の語彙によるものであってよいことになる。もちろんそこで言われる同一は、ほんものと写しとが重ね合わされるといった風な同一ではなくて、二つの言語の間での指示の同一である。

ただ、われわれの困惑をまねく一つの事情は、思想という領域をもちこむとき、どのような条件のもとで思想 t_1 と

思想t_2とが同一とされるのか、という問題である。*言語の次元にモデルを求めるとすれば、思想の同一は指示の同一ではなく（同じものについて異った思想をもちうるから）、意味の同一によらねばならないだろう。しかし、クワインが力説するように、自然言語においては意味の同一（synonymy）を定めることは、或る範囲より先では、同義性（分析性）についての仮説にもとずいて翻訳をすすめることであって、そうした仮説どうしの論理的関係は確定できても、それらはいずれも全体としての言語とは両立しうるから、どれが〝正しい〟ということはないのである。すなわち、さきに示した翻訳の鋳型も、ある程度の同義性を与えるものであるに過ぎない。

一方、脳の神経生理学的過程によって思想の同一を確定することも論理的構想としては可能であるとしても、このときもわれわれは脳の状態（それはすでに universal である）を個々のニューロンによって定義することはできず、それらの統計的な性質によることになり、不確定な要素をふくむことになる。思想過程と脳の過程との同一は、対応の多数のケースから〝帰納〟されたものでなく、理論上の仮設なのであろう。このときわれわれに必要なのは、二つの言語のあいだの書きかえの一般的方針であって、その方針が確認の手つづきに耐えるものであれば、一々の対応の書き上げは不可欠ではないと思われる。一般に科学理論において、例えば化学的性質がミクロ物理学的性質に還元されるというとき、以上のような identification が行なわれている。心身問題における同一説へのアプローチとしては、「同一」の用法を約束した上で、そのモデルの洗錬に努めるべきであろう。

（了）

＊この点の指摘として、cf. Martin, R. M. 'On knowing, believing, thinking,' *Journal of Philosophy* **59** (1962), 586-600.

（筆者　京都大学文学部〔哲学〕研修員）

hätte.

Meaning and Intentionality

by Jun-ichi Tsuchiya

In discussing the problem whether or not that sort of mental discourse which involves terms like 'think', 'believe', is translatable into the language of purely behavioral description, both Wilfrid Sellars and R. M. Chisholm reject behavioristic reductionism and stress the need of metalinguistic discourse. Chisholm, however, asserts that semantical relations are to be analyzed in terms of the intentionality of thoughts. whereas Sellars emphasizes that the semantical statement "p' means p' can be analyzed without introducing the concept of intentionality or aboutness of thoughts, though Sellars accepts the classical view that a statement is the expression of a thought as an inner episode.

In principle we can use semantical vocabulary before we learn mental talk. Semantical talk is the model of mental talk, and in this sense, thoughts are to be construed as inner speech; we can use theoretical statements about the mental as introspective reports after we have learned them as the statements of theoretical explanation. If we can posit thoughts as theoretical constructs, we can also identify them with the neuro-physiological processes in their descriptive or qualitative aspect.